見えるから

水桐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
見えるから

【Ｎコード】
Ｎ２０６９Ｓ

【作者名】
水桐

【あらすじ】
衛仁の苦悩。大丈夫まだべーこんれたすじゃない。

「あー……。」
青空が映える昼下がり、衛仁は休憩室の机に頭を乗せてぼんやりしていた。いや、それは傍目から見ればぼんやりしているだけで衛仁本人はぐるぐると同じ思考を巡らせついには睡魔まで襲ってくる始末であった。
「（…何で俺は見えるんだろうな……。）」
顔を窓の方へ向け外を眺める、この考えは何も今に始まった事じゃない。前から、いやずっと昔から思っていたことだ。幼いころは常人には見えない『何か』が見え泣くばかりでよく瀧二郎に慰められたな、と思い返す。泣きさえしなくなったものの恐らく今でもその本質は変わっていない。
「（瀧二郎みたいに、祓えればな…。）」
そう、衛仁は『見る』ことはできても瀧二郎のように『祓う』ことができない。いつもその嘆き惜しみ憎しみの念を見ている事しかできずに、ましてや憑いてこられても自分ではどうにもできないのだ。それがいつも口惜しくて、悔しくてたまらなかった。彼等を鎮めてやれない、自分自身さえ救えない。しかしそれがきちんとした形になったのはつい最近だった。
「（……あの人に。）」
あの人の肩に影を見た時からそれは明確に形を見せた。その影からはよく感情が伝わってこなかったが、それでもあの人には必ず何らかの影響が出る。だからこそどうにかしたかった。それがただの念でないことくらい分かった、影の格好が大和の国のものではなかったからだ。それを見てあの人の出身、昔ちらと見た新聞記事を思い出して合点がいった。あれは。
「（……。）」
そこまで考えて衛仁は机の上に組んでいた腕へ顔を埋めた。彼の

闇を知り苦悩を知った今だからこそ分かる、あの影。腕の中で目を伏せぼんやりと考えた、彼を守れるかと。体格差、年齢、頭脳とほとんど敵うことはない彼を守るなど傍から見ればさぞや滑稽なのかもしれない。それでもあの影、嫌な雰囲気を持つものが憑けば全ては悪い方向へ進む、それを衛仁は身にしみる程よく知っていた。

「（それしか俺にできることは無いしな…。）」

ふ、と微かに笑い伏せていた顔をまた窓へと戻した。世界はなんら変わらず時を進める、雲は流れ空は高々と広く風は心地良い春の匂いを運ぶ。その時休憩室のドアが開く音がして衛仁は緩慢とした動きで入口に目を向けた。其処に見えたのは窓から入る光に照らされる深紅、彼はまた眉間に皺を寄せていた。それを見た衛仁はやはりわらい、言った。

「こんにちは。飴、いります？」

今度瀧二郎に祓う術を教えてもらおうか、まどろみそうに暖かい昼下がりに一人そう思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2069s/

見えるから

2011年10月8日19時37分発行